青鬼

あおおに

図書館の透明人間

noprops／原作
黒田研二／著
鈴羅木かりん／イラスト

PHP
ジュニアノベル

卓郎
東部小学校の五年生。頭の回転が早く、決断力と行動力がある。頼れる存在。
たけし
南部小学校の五年生。お調子者で臆病。でも、誰よりも友達思いのイイヤツ。
ひろし
北部小学校の五年生。小学生とは思えない、洞察力と知識がある。なぞ解きが得意。
タケル
ビション・フリーゼという種類の犬。大切な人たちを助けるために、怪物と勇敢にたたかった。人間の言葉をすべて理解していることをずっと秘密にしていたが、ついにひろしに知られてしまった。
美香
東部小学校の五年生。幼なじみの卓郎と、いつも一緒にいる。運動神経バツグン。

怪物（ブルーデーモン）

ブルーベリー色の巨人。人間を見るとおそいかかってくる。ひろしたちはこの夏、「ジェイルハウス」などあらゆる場所でこの怪物に遭遇したが、犬が苦手であることや、頭が重く泳ぐことができないなどの弱点を突くかたちで、なんとか魔の手を逃れてきた。宇宙から飛来した物質・ブルースターの中に入っていた虫「パラサイトバグ」が体内に入ることが原因で、人間が怪物に変異する可能性があることがわかってきた。

マロン

シーズーという種類の犬。女の子。ペットショップでひどい扱いを受けていたところを、タケルとひろしに助け出され、今は美香の家で幸せに暮らしている。

ハルナ先生

ひろしが通う北部小学校の教師。親友のユズキをはじめ、生徒たちが多数失踪し、閉鎖されることになった碧奥小学校の元・生徒でもある。クロさんから受けた裏切りに傷つき、しばらく学校を休んでいたが、最近復帰した。

ナオ

北部小学校の五年生。ひろしのクラスメイトで、クロさんとは叔父・姪の関係。

クロさん

怪物のことを「ブルーデーモン」と呼び、宇宙から飛来したブルースターを集め、この世界をブルーデーモンだらけにすることをもくろんでいる。自らもブルーデーモン化できる能力を得た。

目次

1 休日の図書室 006
2 幽霊の正体見たり 018
3 ひろし君の魔法 026
4 魔法の種明かし 034
5 たけし君の秘密兵器 044
6 行方不明のシャムネコ 052
7 クロさんからの挑戦状 062
8 襲撃場所はどこ？ 075
9 チャムチャム発見？ 085
10 新たな怪物 094
11 不気味な物音 107
12 クロさんの暴走 119
13 脱出ルートを探せ 135
14 かくれているのはだれ？ 144
15 シルピー再び 154
16 図書館の透明人間 163
17 シルピーはどこだ？ 172
18 疑心暗鬼 182
19 秘密のとびら 194
20 とびらの向こう側 204
21 さよならシルピー 216
ひろしによるなぞの解説 233

あらすじ

この夏、化け物「ブルーデーモン」の攻撃や、クロさんの恐ろしい企みに対し、仲間とともに知恵と勇気で何度もピンチを切りぬけてきた、ぼく――タケル。ぼくは犬でありながら、実は人間の言葉を全部理解してる。そのことをずっと秘密にしてきたんだけど、シーズーの女の子・マロンちゃんの名前をどうしてもみんなに伝えたくて……ひろし君にだけ、その秘密を明かすことにしたんだ。それからひろし君は、ぼくに新しい「知恵」を教えてくれたから、一生懸命勉強してるところだよ。

今日は、ひろし君とナオちゃんといっしょに、クロさんの次の襲撃場所を予測するため、本がたくさんある北部小学校の図書室に集まることにしたんだけど……ぼくも何か役に立てるかな？

1 休日の図書室

寝そべったまま、大きなあくびをひとつする。

ここは北部小学校の図書室。床にしきつめられた木目柄のタイルが、お腹にひんやりと冷たい。夏の間は気持ちよかったけれど、九月も終わりに近づくと、さすがに快適とはいいがたい。

ぼくはあまえた声で鳴いてみせた。小難しいタイトルの本に目を通していたひろし君が顔を上げてこちらを見る。

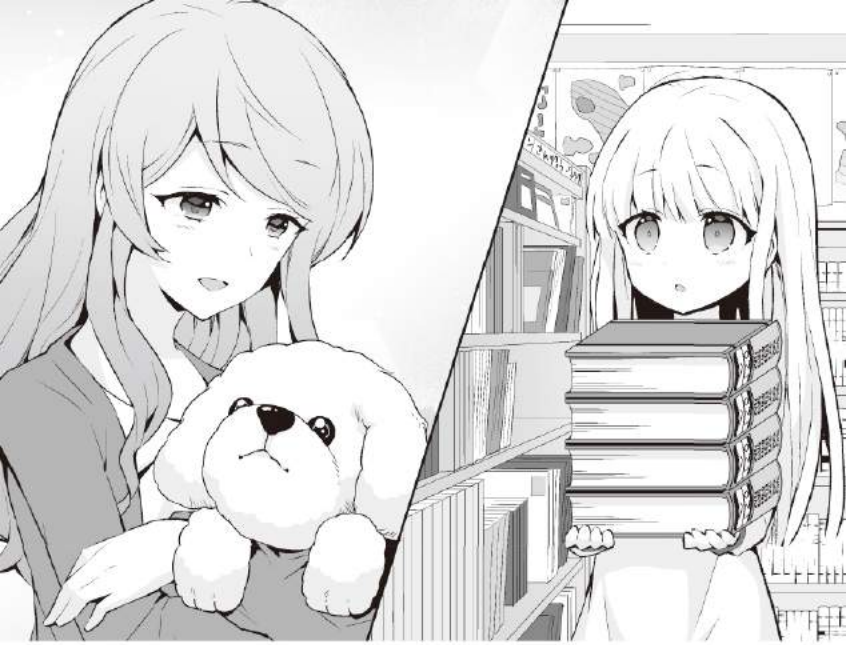
「どうかしましたか？」

ぼくはクーン、クーン、と二回続けて鼻を鳴らしたあと、ワン！　と短くほえ、さらにもう一度、クーンと鳴いた。

ひろし君はとくに反応するわけでもなく、だまってぼくのほうをながめている。ぼくは少し間を置いてから、クーン――今度は少し長めに鼻を鳴らした。

ぼくを見ているのか、それともただ宙を見つめて考えごとをしているだけなのか、ひろし君は一点を見つめたまま、まったく動こうとしない。

……あれ？　ひょっとしてわかっていないのかな？
ぼくは立ち上がると、力強くほえ、そのあとすぐに弱々しく鼻を鳴らした。
「タケルちゃん、大丈夫？」
背後から声が聞こえ、同時にぼくのからだはふわりと宙にうかび上がった。ハルナ先生がやわらかなほっぺたを、ぼくの鼻先にこすりつけてくる。昔かいだことのあるお母さんによく似たなつかしい香りが鼻孔をくすぐった。
「ねえ。この子、さっきから様子がおかしくない？」
ぼくを見下ろしながら、ハルナ先生は心配そうな表情でいった。
「なんだか悲しそうな声で鳴いてるし、かと思えば、急に大声でほえたりして……どこかからだの調子でも悪いんじゃないの？」
ふだんのぼくはどちらかといえば無口だし、あまえた声なんてめったに出さない。ハルナ先生が不安に思うのも当然だった。
「タケル、最近はずーっとこんな調子だけどね」
大量の本をかかえたナオちゃんが、危なっかしい足取りで近づいてくる。
「たぶん、コイワズライ」



右へふらふら、左へふらふら、よっぱらったときのお父さんみたいな歩き方をしながら、ナオちゃんは呪文みたいな言葉をみんなに投げかけた。

「コイ……ワズライ？」

ひろし君が首を右にかたむける。

「タケル、ガールフレンドができたでしょ？その子に会いたくて会いたくて仕方がなくて、だから悲しそうに鳴いてるんだと思うよ」

ナオちゃんの予想は半分当たって半分まちがっていた。ガールフレンドにはもちろん今すぐにでも会いたい。でも、鼻を鳴らしている理由はそれじゃなかった。

「タケルちゃんのガールフレンドって……マ

ロンちゃんだったっけ？　美香さんの家族になったシーズーよね？　先生も会ってみたいなあ」
そういって、ハルナ先生はぼくの顔をのぞきこんできた。
「あなたのガールフレンド、先生にも紹介してもらえる？」
もちろん！
ぼくはしっぽをふって答えた。
「うらやましいぞ、この！」
ハルナ先生は笑いながらぼくの頭の毛をやさしくなでた。その表情は自然で、無理をしているようには見えない。
〈まほろば遊園地〉の一件で、クロさんの本性を知ってしまったことが原因だったのだろう――ハルナ先生はしばらくの間、体調をくずして学校を休んでいた。
先週ようやく復帰したことはひろし君から聞いて知っていたが、好意をいだいていたクロさんにあんなひどい裏切られかたをしたのだ――本当にショックから立ち直ることができたのか、実際に顔を合わせるまでは心配で仕方がなかった。
ひさしぶりに会ったハルナ先生は、少しだけやせたような気もしたけれど、以前と変わらない明るい笑顔をぼくたちに見せてくれた。どうやら、クロさんのことは完全にふっ切ったようだ。

「ひろし君、これでよかったかな？」
ナオちゃんがひろし君のそばに分厚い書物を何冊も積み上げる。表紙には、『碧奥新聞縮刷版』と記されていた。地元で発行された新聞を一冊にまとめたものらしい。タイトルの下には二十年前の年号が印刷してある。
「ねえねえ。前から疑問に思ってたんだけど、図書室の本にはりつけてあるこのシールってどういう意味があるの？」
『碧奥新聞縮刷版』の背表紙を指差し、ナオちゃんはたずねた。その分厚い本には、〈071〉と印刷されたシールがはりつけてある。
「それは請求記号ラベルよ」
ひろし君より先にハルナ先生が答えた。
「一番上に書かれている数字は分類記号といって、どのような内容の本なのかがひと目でわかるようになっているの」
「へえ、そうなんだあ」
「もし最初の数字が〈4〉だったら、それは科学に関する本。ふたつめの数字でさらに細かく分類されて、たとえば〈44〉なら天文学、〈48〉なら動物学の本だってわかるわけ」

「じゃあ、三つめの数字でもっともっと細かく分類されてるってこと？」
「そう。同じ動物学でも、たとえば〈４８６〉は昆虫について書かれた本、〈４８８〉は鳥について書かれた本って分類されてるわ」
「ふーん。背表紙のシールを見たらどんな本かすぐにわかっちゃうんだね」
ナオちゃんは感心したように首をたてにふった。
「〈０７１〉は日本の新聞」
ひろし君の前に積み上がった『碧奥新聞縮刷版』の背表紙を指差し、ハルナ先生は続けた。
「ちなみに数字の下に印刷されているのは、作者名の頭文字。新聞は作者が存在しないから、〈碧奥新聞編集部〉の頭文字をとって〈へ〉って記しているんじゃないかしら」
「すごい、すごい！　ハルナ先生、本物の先生みたい！」
ナオちゃんが手をたたいてはしゃぐ。
「本物の先生です」
ハルナ先生はくちびるをとがらせ、ナオちゃんをひとにらみした。
「今日の授業はここまで。そんなことよりもひろし君――」
本をじっと見つめたまま、ひとこともしゃべろうとしないひろし君にハルナ先生はたずねた。

「せっかくの日曜日だっていうのに、朝早くから学校へ来て、そんなにも熱心に一体なにを調べているの？」

ひろし君の通う北部小学校は、学校が休みの日でも、子供たちのために図書室と体育館を開放している。ハルナ先生が図書室の当番をする時間帯をねらってやってきたのだろう。

ほかの先生だったら、ぼくの入室を許可してはくれないし、机の上に十冊以上の本を積み上げたらソッコーで注意されるにちがいない。

「二十年前に碧奥町周辺に降り注いだ隕石の正確な落下地点についてです」

ハルナ先生の質問に、ひろし君はようやく顔をあげて答えた。

「そんなことを調べてどうするつもり？」

ハルナ先生が首をかしげる。

「先日、碧奥山の天文台が襲撃された事件はご存じですよね？」

「もちろん。そのせいで、ひろし君が招待されるはずだったイベントが中止になってしまったんでしょう？」

「天文台をおそった犯人はクロさんです」
ぼくはハラハラせずにはいられなかった。クロさんの名前を聞いたらハルナ先生がどう思うのか、ひろし君はなにも考えていないのだろう。
「クロさんが天文台からうばっていったものは、二十年前の隕石について記された資料でした」
おどろきのあまりなにも答えられないハルナ先生をしり目に、ひろし君はさらに言葉を重ねた。
「隕石の正体は青い金属の物体――ブルースターです。隕石の落下した場所には今でもブルースターがうまっています。ハルナ先生の母校である〈碧奥小学校〉も、駅前の映画館〈エキサイドシネマ〉も、となり町にあった〈まほろば遊園地〉も、隕石の落下地点でした。そこには必ずブルースターがあり、そしてブルースター内にはあらゆる生物を青く巨大な形に変異させる寄生虫――パラサイトバグが存在します」
ひろし君の説明はよどみなく続いた。目の前にある本を音読しているかのように、すらすらと言葉をつむいでいく。
「クロさんは青い凶暴な生物――ブルーデーモンを増やして自分の仲間にしようとたくらんでいます。ブルーデーモンを生成するにはパラサイトバグが必要です。パラサイトバグを手に入れる

ためには、地中深くにうまったブルースターを見つけなくてはなりません」
「ああ……だから叔父さんは、天文台から資料をぬすんでいったんだ」
ナオちゃんの言葉に、ひろし君はこくりとうなずいた。
「ブルースターのうまっている場所を知ったクロさんは、どこかでまた〈エキサイドシネマ〉のときと同じような騒動を起こすかもしれません。新たな事件を阻止するためにも、僕たちはできるだけ早くブルースターの落下地点をつき止めなければならないのです」
「それで、日曜日の朝早くからそんな難しい顔をして図書室の本とにらめっこしていたってわけ？」
ハルナ先生が小さくかたをすくめる。
「天文台に問い合わせたら教えてもらえるんじゃないかしら？」
「電話をかけましたが、期待したような回答は得られませんでした」
「なにそれ、ひどい！　こっちが子供だから、ちゃんと説明してくれなかったってこと？」
ナオちゃんがくちびるをとがらせた。
「だったら先生が――」
口を開いたハルナ先生の顔の前に手のひらをつき出し、ひろし君はかぶりをふった。

「いえ、天文台のかたはとても親切に対応してくださいました。ただ、二十年前の隕石落下に関するデータはバックアップもいっさい残っておらず、資料がぬすまれてしまった今となってはなにもわからないとのことで……」

ひろし君はそこまでしゃべるとだまりこみ、無表情のままメガネのフレームをおし上げた。みんなには伝わらなかっただろうが、たぶんくやしがったんだと思う。

「あの人がたくらんでいる悪事を未然に食い止めたい――ひろし君のその気持ちはわからないわけでもないけれど……」

ハルナ先生が困惑気味にいう。

「それって君がやらなくちゃいけないことかしら？　警察に任せればいいんじゃないの？」

「警察が動くのは事件が起こったあとです。それではおそすぎます。〈エキサイドシネマ〉のときのような悲惨な事件を二度と起こしてはなりません」

ひろし君の言葉に、ぼくは強く同意した。

パニック状態で映画館から飛び出してきた大勢の人々。けが人もたくさんいた。

今思い出してもぞっとする。

あんな光景は二度と目にしたくない。

「市民の安全を守るのが警察の仕事よ。ちゃんと説明したらわかってもらえるんじゃない？」
「では、先生なら警察にどう説明しますか？」
ひろし君は真正面からハルナ先生を見つめた。
「宇宙から飛来した生命体がこの町の地下にねむっている。その生命体が地球上の生物の体内に入ると、ひふが青く変色し、巨大化し、凶暴になる。そんな話を警察が信じると思いますか？」
「それは……」
ひろし君の有無をいわせぬ強い口調に、ハルナ先生は口ごもってしまった。
「一週間前、三体のブルーデーモンが〈エキサイドシネマ〉に現れ、訪れていた客を次々とおそいました。その姿を実際に目撃した者は百名をくだらなかったはずです。にもかかわらず、ブルーデーモンの存在が公になることはありませんでした」
ひろし君はいすの背もたれにひっかけてあった黒い手提げかばんから一冊のノートを取り出すと、それを机の上に広げてみせた。
ノートには新聞記事の切り抜きがはりつけてあった。新聞の日付は九月二十日。映画館の事件の翌日だ。

映画館に三匹のサルが乱入

記事の見出しにはそう記されていた。